

令和5年1月1日発行 巻数・第78巻第1号(毎月1日発行) 昭和25年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2023 January

1 月号



成瀬櫻桃子の句

俊寛忌引きずつてくる若布かな

「春燈」平成五年

『平家物語』第三巻「足摺」俊寛一人だけが赦免されず鬼界ヶ島に残される。「僧都せん方なきにたふれふし、おさなき者のやうに足すりをして、△是のせてゆけ」とおめけ共、漕行く船の習ひにて、跡は白波ばかり也」

使者に傲慢な態度を取続けた俊寛も、遂には幼児の様に渚を蹴る。砂に残った足摺の跡も、そしていま若布を引きずつてくる跡も、やがて波が消してしまふのだ。

片山博介

# 成瀬櫻桃子の句

## 白菖蒲子を恋ひをれば翳りけり

『素心』昭和五十六年

櫻桃子師は、岐阜県石村町で生まれた。ところが、両親の離婚により、生後十ヶ月で母に連れられて上京した。師は長じて幸せな結婚をしたが、第二子の長女が蒙古症と医師に告げられる。自身の境遇と娘の宿命を直視して生まれたのが本句。第一句集『風色』には、娘を哀れみ、愛する句が並ぶ。「白菖蒲」は、純心さを失わない娘の象徴であり、「翳りけり」は父なる師の愛憐なのである。

山本泰人

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

秋澄むや一番星のはや点る

秋扇難読の書にはさみけり

ふるさとの川瀬や今も水澄めり

蒼空に疲れありけり曼珠沙華

新蕎麦の浅き香りや旅の宿

ゆふぞらの真つ赤や鵲の声尖る

秋惜しむひとつ荔枝を手包み

寡黙なる茸らの夜は饒舌に

行く秋や目覚めの空を見て飽かず

明月へ地球の水音風の声



# 当月集

鈴木直充選



○ 辻 泰子

水澄むや梅花藻なびく街の川

パズルの如き石の階段鱗雲 (遊行寺)

青い眼の大道芸や秋深し

コスモスや負けず嫌ひの背くらべ

音階を探るハープや星月夜

○ 小林 文良

行く秋や嬢の愚痴聞くきのふけふ

稲の香やはやばや灯る散居村

新米や逸りて薄きおみおつけ

鼻先で風をあしらふ芒かな

素風連れ芸者の通る楚

○ 重実ひとみ

吾も猫も共に老いたり零余子飯

子は親を選べず木の実降りにけり

人類も絶滅危俱種虫しぐれ

猫車押してみかんは表年

二羽三羽数ふるうちに鴨無数

○ 佐藤まさ子

晴の日の鎌倉の谷紅葉かな

ブラウスの胸の飾りに吾亦紅

十月や友と再会果たしたる

夕餉時今年細身の秋刀魚焼く

秋雨や友の便りをそつと開け

○ 松木ゆきえ

薪爆ずる秋の高原ホテルかな

種飛んで我が家に咲きし鶏頭花

樟大樹ビルに挟まれ秋深し

そぞろ寒陽気な動画スマホに来

目の合うて秋刀魚と決むる夕餉かな

# 春燈の句

鈴木直充選

病床日誌書き終へ仰ぐ後の月

栃木 和気 登

裏山は紅葉の筈や無菌室

山頭火忌涙目のまま眠りけり

闘病の灯火親しむ一書かな

陸上の風切る少女天高し

純色の大利根川や稲光

金賞に父の名を見る菊花展

大皿の汚れの落ちず夜寒かな

落柿舎へ嵯峨の力車の刈田道

祇王寺の苔むす磴の松ぼくり

あだし野のほとけに秋の日の欠片

「いもぼょう」の女将様良き秋拾

風に乗る有線放送島の秋

教会のバザーに葉缶小鳥来る

転勤や満天星紅葉を饅に

晩秋の多摩川暮るる風の音

銀杏散り空の青さを彩れり

たそがれに色を深むる花野かな

頬ゆるむ椀一杯の茸汁

立冬や雨にしづまる始発駅

香具師うまく野次に答へてバナナ売る

幼児の知恵瑞々し文化の日

新松子慈母観音は子を抱いて

零余子飯炊けましたよと告げにくる

小鳥来るをさなは兄になると言ふ

前略より続かぬ手紙夜半の秋

秋薔薇師とも姉とも慕ひけり

時雨るるや宿坊並ぶ羽黒山



東京 竹内 陽

千葉 木村秋草子

千葉 大平さゆり

東京 中村 朋子

神奈川 奥田 眞二

千葉 福田 水明